

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「泌尿器科学, 器官制御生理学」

信州大学医学部器官制御生理学講座

永井 崇

医学部を卒業後、泌尿器科に入局し現在は器官制御生理学講座に籍を置いています。どちらの講座へも当初は強い関心などありませんでした。卒業試験を終えた後、将来像も医師としての理想像もなくどうしたものかと考えていた時、高校時代に入院し空きベッドの都合で泌尿器科病棟にて過ごしたことやそこで腎移植待ちの患者、膀胱癌の術後患者とよく話をしたことを思い出し何かの縁があるのかも泌尿器科への入局を決めたのでした。入局後、小児から高齢者まで内科的、外科的に携わる泌尿器科の奥深さに改めて感銘を受け、大変だがやりがいも感じ良い選択をしたと思えました。

ただ全ての患者が軽快し退院していくわけではありません。長く病気を患い亡くなっていく方も大勢おります。対症療法にて苦痛を軽減し残り少ない時間を有

意義に送ってもらいたいと願うのですが思うようにいかないこともあります。ある多発リンパ節転移、骨転移を伴った末期の前立腺癌患者が看護師に言った「早く死んで楽になりたい」という一言が忘れられません。骨転移などによる痛み自体はコントロールできているもののリンパ節転移による下肢の浮腫みがひどく皮膚を押すと滲み出るほどで、痛いというより重く圧迫されるような感じで身の置き所のない感じなのだとおっしゃっていました。下肢のマッサージをするといくらか気持ちがいいのですがすぐに元の状態になってしまう。看護師は私に浮腫みを取り除く方法はないのかと尋ねるのですが妙案はありませんでした。当時、現在の研究室に大学院生として在籍しリンパの流れについて研究していたこともあり、リンパ節転移のメカニズムや転移の有無を診断する方法、浮腫を改善する方法など少しでも解明できればと思うようになり現在に至っております。些細なことをきっかけに自分の人生の選択をしてきましたがどちらの仕事もやりがいがあり有意義に感じております。

(信大平11年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「小児科」

信州大学医学部小児医学講座  
伊那中央病院小児科

高 附 充 帆

私は子供が大好きです。医学部に入学した頃は、子供が好き、という単純な理由で小児科に漠然とした憧れを抱いていました。子供たちの笑顔に囲まれて、ワイワイと、毎日楽しく仕事をするという、あまりにも幼稚な小児科像を描いていました。しかし…一般病院での初期研修で小児科を選択した時、そんな私の幼稚な夢は打ち砕かれました。大好きな子供には「嫌なことをする人」と認識され嫌われ、検査をしたくても泣かれて暴れられて思うようにできず…。

それだけなら良いのですが、何より命に関わるような、重傷な患者さんに出会った時は、自分の甘い小児科への憧れを本当に恥ずかしく思いました。冷静になれず、泣き崩れてしまうご両親、それでも事実をお話しなければならぬ小児科医…。こんなに辛い現実や重い責任を、自分には背負える訳がないと、その時の

私は思いました。

しかし、当時私の出会った小児科の先生方は、その子供の命に全力で向かっていきました。「もうダメかもしれない、どうしたら良いのか…」病棟にそんな暗い雰囲気が漂う中、小児科の先生方は、病室に足しげく通い、一日に何度もご両親と話をしました。少しの可能性にかけて、最後の最後まで、検査や治療を全力で行いました。それがその患者さんやご家族にとって、良かったことなのかはわかりません。でも、最後の最後まで患者さんの命を諦めず、命に全力になれること、その医師としての本来の姿を小児科で実感し、「こんな医師になりたい」と思う様になりました。

小児科は、お子さんの成長を見守り、一緒に成長を実感できる、とても素敵な科です。一方で、命に関わるような重篤な状態の時、周囲に及ぼす影響はとてつもなく大きく、医師にかかる責任もとても大きなものです。私はまだまだ未熟で、患者さんの命と向き合うことに不安を感じてばかりですが、初心を忘れず、命に全力投球できるような医師になれる様、日々学んでいければと思っています。

(高知大平22年卒)